

Economic Indicators

発表日: 2022 年 12 月 7 日 (水)

景気動向指数(2022 年 10 月)

～目先、基調判断が「足踏み」に下方修正される可能性も～

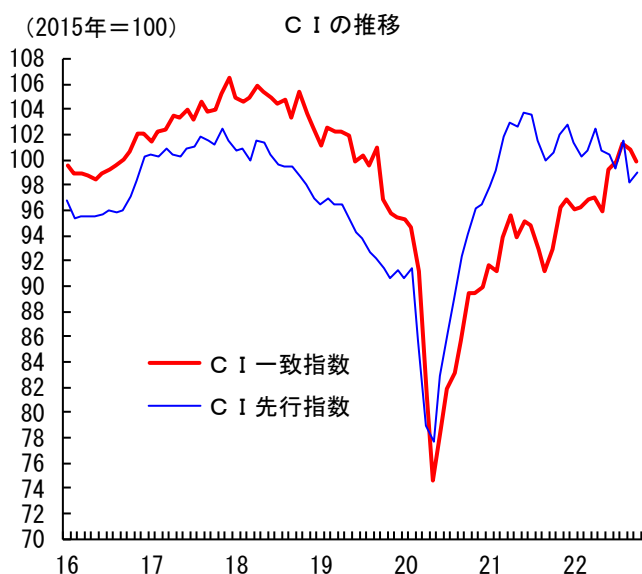
第一生命経済研究所

シニアエグゼクティブエコノミスト 新家 義貴

(TEL: 050-5474-7490)

内閣府から公表された 2022 年 10 月の景気動向指数では、C I 一致指数が前月差▲0.9 ポイントとなった。内訳では、有効求人倍率などがプラス寄与となった一方で、鉱工業生産指数や投資財出荷指数などの生産・出荷関連系列が押し下げ要因となっている。

C I 一致指数は 9 月の前月差▲0.5 ポイントに続いて 2 ヶ月連続の低下となったが、6 月～8 月の速いペースでの回復からの反動の面が大きい。水準も高いままであり、持ち直しの動きが現時点で崩れているわけではないだろう。内閣府による C I 一致指数の基調判断も 9 ヶ月連続で「改善」となっている。



とはいえ、先行きについては懸念が残る。 (出所)内閣府「景気動向指数」

10 月の鉱工業生産指数は前月比▲2.6%と 2

ヶ月連続の減産となったことに加え、製造工業生産予測指数において、予測指数の下振れバイアスを除去した経済産業省の補正試算値では 11 月に前月比▲0.8%となっている。鉱工業生産が 3 ヶ月連続の低下となる可能性は十分ある状況だ。10-12 月期は前期比で減産となる可能性が高いことに加え、23 年 1-3 月期についても海外経済減速の影響で輸出が下押しされる可能性があり、生産はこの先下振れ含みである。

ちなみに、仮に 11 月の C I 一致指数が前月差▲1.6 ポイントを超えるマイナスとなれば、基調判断の「足踏み」への下方修正基準を満たすことになる。11 月分でここまでのマイナスになる可能性は低いだろうが、11 月、12 月とも小幅マイナス、あるいは 11 月がマイナス、12 月がプラス、1 月がマイナスといった形でも下方修正基準は満たす可能性が高い。目先数ヶ月で基調判断の下方修正が実現する可能性は相応にあるだろう。

また、良く知られているとおり、景気動向指数には製造業関連の系列が多く採用されていることから、C I 一致指数は輸出や鉱工業生産の影響を受けやすい。仮にこの先、海外経済の減速から輸出が落ち込む展開となるようであれば、基調判断は「足踏み」にとどまらず、「下方への局面変化」、「悪化」へと進んでいく可能性があることも意識しておく必要がある。

本資料は情報提供を目的として作成されたものであり、投資勧誘を目的としたものではありません。作成時点で、第一生命経済研究所調査研究本部経済調査部が信ずるに足ると判断した情報に基づき作成していますが、その正確性、完全性に対する責任は負いません。見直しは予告なく変更されることがあります。また、記載された内容は、第一生命保険ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。

